魔法先生ネギま!――哀川優織の躍動世界――

葵（仮）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま！――哀川優織の躍動世界――

【Ｎコード】
Ｎ２８１３ＢＡ

【作者名】
葵（仮）

【あらすじ】
少しずれた世界。
何で死んだのかは、解明する事は叶わない。
気付けばそこは裁判現場。被告人は「僕」で検察官は「神様」。
裁判を壊してしまったら、どこかの川に出たり、すんごい美人にあったり、自分の人生の根本を聞かされたり。
そして世界は角度を変えてずれていく。
ああすばらしきこの世界。
なんてくそったれな世界なんでしょうか。

魔法なんて使おうともおもわない。
目的？復讐かもしれないし、違うかもしれないな。
のんびり出来るといいな、って。
まぁ、そんなお話。

第一話（前書き）

プロローグと序章が完了するまで只管に予約投稿。
初回に限り昼０時ですが、以降は夕方６時。深夜０時に更新。序章はたぶん計７・８回。
合計、メモ帳にして約８０ｋｂ
習作です。過度の更新は期待しませんよう。
また、小説情報から作者ページへ行って、私のほかの駄作に手を伸ばすのはやめておいたほうがいい、と先に言っておきます。

では、挨拶はこれにて。

楽しく読んでいただければ幸いで御座います。

※この小説は、著・赤松健「魔法先生ネギま！」、著・西尾維新「ネコソギラジカル」並びに戯言シリーズ及び、「零崎人識の人間関係」並びに人間シリーズ、「化物語」シリーズなどの設定を拝借させていただきます。端的に言わせていただきますと、主軸として「魔法先生ネギま！」を、設定要素及び物語の若干の交錯要素として西尾維新氏作品と混ぜた、というものです。

そういったものがお嫌いな方、ブラウザバックをお勧めいたします。

また、この作品は習作として自分の出来る限りの表現を使って書かせていただいています。そのため、読者様からの文法のおかしなところや表現技法のへんなところなどの指摘を、お待ちしています。

では、長くなりましたが、お楽しみいただければ不精私目、感謝感

激の極みで御座います。お楽しみいただけることを願っております。

第一話

――あぁ、僕は死んだんだな。

理解すること自体に、時間は必要なかった。

唐突過ぎはしたが、覚えが無いわけではなかった。

当たり前と言っては当たり前なんじゃないだろうかと、そう思う。

自分はそれだけのことをした。歴然とした自覚がある。

そもそも、そんなことをして、逆に自分がそうならないなんていう保証は無い。寧ろ、なる可能性の方が高い。因果応報というやつだ。

だが、そうだからといって納得する気は毛一本、毛頭もない。

と、まぁ少し話は変わるが、ヒトの「意識」というものは何に依存するものなのか、考えたことはあるだろうか？　僕はある。しょっちゅうだ。何か行き詰まった時、現実が疲れた時、そんな時、哲学的というか、そういう事を考えると、意外と落ち着く。

――っと、話が脱線した。

例えば、人間の意識は脳にあるとしよう。というか、この場合意識というよりは、「心」と言った方が適切かもしれない。

医療技術の中に、「移植」というものがあるだろう。

もし仮に、技術が進歩して「脳」の移植が可能になったとする。

でもさ、脳って何が詰まっているんだい？

そこでさっきの例だ。脳の中にあるのは「心」だとする。脳味噌だとか、そういうのは今はおいておく事にしよう。

あるところに少年が一人いたとする。

平凡な日常を送っていた少年は、事故で全身麻痺。二度と動けず、

最低限、意思を伝える事しか出来ない。これはまぁ、脳以外の死ってことだ。

またあるところに、少女が一人いたとする。……別に、少年でも良いけれど。
少女もこれまた事故に遭う。彼女は体は奇跡的に助かったが、ショックで意思を伝える事もできなくなる。これはつまり、脳死。

それは何の因果か、運命の悪戯か。
その事故、同日に起きて、同じ緊急病院に運ばれる。
これまた不思議。二人を担当した医師は同じ人。
医師は考えた、そう、脳移植を。
世界は未来、技術はほぼ確立。
ならやることは一つしかない。医者の本分は、一人でも多く、助けられる命を助ける事。
手術は成功。晴れて、パーツが半分ずつ足りなかった二人の人間は足して二で割ることで、一人のヒトとして生きながらえた。

さて、そこで問題だ。その場合、意識はどちらにある？
当然、少年の方。
なんてったって、「心」は脳に宿るんだから。
じゃあさ、少女の「心」は何処にいったの？

と、どうでもいい例えはここまでにして、本題の本題だ。
行き場を失った「心」……まぁ、また言い換えて有体に言えば、「魂」ってところか。
本来、宿るはずだった場所を追いやられた「魂」は何処へか。
それは正しく、神のみぞ、知るっつーわけだ。
要は、脳の死とヒトの魂の方向性と関係性のことを説いてるわけ。

そして、そんな僕は脳死判定なのかはわからない。
考える頭があるならば「心」はきっとあるから。
それならきっと、心は脳にはなくて、他のどこかにあるということなんだろう。

どうでもいいことかな――。

――――――――――――――

罰って、こわいと思う。
罪やらなんやらって、現実でばれなくたってカミサマとやらがわかっているらしい。
僕が死んだ理由は単純。人生で、いろいろやりすぎたから。

――一寸先は、闇。

いや――やりすぎたという表現は少しおかしいかもしれない。
僕がやったという確信はしかと持っているが、信じたくは、ない。

――三寸先は、大きな机と椅子に座る何人かの老人たち。その場所は、スポットライトが当たっているかのように明るい。

僕が手を動かすと、ジャラリ、と手錠から何処に繋がっているのかわからない鎖も、一緒に揺れる。

――腕には、冷たく重い金属の手錠。

腕に圧迫感を感じて、少し不快な気分になる。
と、そんな折、不思議な声がこの空間に訪れた。

――【静粛に】

凛とした、威圧感のある声が発せられると同じに、ヒソヒソと喋っていた老人たちが静まる。
女か――男か。中性的で、どちらかといえば、女に近いような、そんな気がする。

カン、カンと相槌……というのだったか、その音はそれの始まりを告げる。
――あぁ、始まるのか。

――裁判。
そう、この場所、空間を動詞を含めた言葉で言い表すなら、「裁判」だ。
裁判官が前方１８０度に扇のようにして7人ほど座り、その真中には、先ほど他の老人たちを黙らせた声の主。指し表すなら、この場での最高責任者というところであろうか。その場所だけ、ほか６人と違い、未だ光が当たらず、どんな人物なのかを窺う事が出来ない。
普通の裁判と違うのは、弁護側がいないことと、検察側がいないこと、あと、暗いこと。でもたぶん、意見を発する事も許されない。
日本国憲法どうした。ワイマールを返せ。

というか、裁判官一人一人が検察でもあるようなものか。何そのワンサイドゲームこわい。
それはそうと、弁護無しなんて酷いと思う。幾ら金が無いといっても、弁護士ぐらい出してもらってもいいじゃないか。僕は心の中で小さく怒りの念（？）を発する。
まぁ、どうでもいいか。
僕は適当に納得すると、先ほどの声がした方を見やる。

その時、やっとというか、唐突に中心の人物に光が当たった。
パッ、とその姿が露になるまでに、当然ながらＣＭやカウントダウンなんてものはなくて、唐突で味気ないものだったけれど、僕は……目を離す事が、出来なくなった。
それは魅力か。否、最早それは魔力といっても過言ではない。
神々しさ、美しさ、そんな陳腐でチープな言葉では言い表せないほどに、それは凄まじかった。

中心に現れたのは、他６人などとは格が違う、というか同じ空気を吸うことさえ許さないといわんばかりに、圧倒的な、そう――女性だった。
僕は自分の目を疑った。こんな「神秘」が存在するのか。こんなものが存在していいのか。
瞬きすらも許されず、吐息を漏らす事も是とされない。

そんな僕の様子を見ていないのか、その女性は淡白に手に持った紙を読み上げる。

【被告人には、刑罰が科せられる。被告人「」は正しく、人の一生では補え切れないほどの罪を犯した。そこに酌量の余地はなしと思われ――――】

女性が僕を見ていないように、僕もなにをいっているのかなど、聞いていなかった。
唯一つだけの思いが僕の脳内を、濁流の如く駆け巡る。
思いの奔流が、脳の中を完全に巡り終わると同時に、カチリと、何かが繋がったような気がした。
――駄目だ。抑え切れない。抑え切れるはずがない。

そこに理性はなく。そこに知性はない。
――或るのはただ、野生のみ。獰猛な狼の如き、狂った野生のみ。

「心」が、飛んだ。
「体」が、躍動した。
「意識」が、弾けた。

「　　」が牙を剥いた。

僕が右回りに5度傾いたのを感じた。

――――――――――――――――

自分で、何をしたのか全く理解できなかった。
気付いた時には、目を白黒させ、現状を理解する事が出来ない女性と、同じく、現状を理解できない僕しか、その場で「心」を動かすものはいなくなっていた。

恐らく、恐らくだが、老人たちは何もわからないまま、その命の灯火を、雪崩の如き濁流に飲まれ消していったのだろう。
僕自身、寸分も理解できない事を、他人の理解に及ぶ道理があるとも思わない。

気付けば、腕には先ほどまであったずしりとした重みや、ジャラジャラと五月蠅い音はなくなっていて。
どうやって外したんだろう、そう思って腕を見れば、人より少しばかり華奢な腕はあられもない方向へとアクセラレィションしていた。
ついでに、ポタポタと自分の物ではない血が、滴っていた。

地べたに倒れる老人たちをよく見れば、これまた酷い。

皆々顔か、心臓があるはずだったスペースに空き容量があった。

僕が、やったのか？

またか。

やはり、抑え切れなかった。

もう一度、女性の方を見る。

僕の意思とは違う「　　」が、勝手に言った。

「結婚しましょう」

場にはまた、静寂が戻ってくる。

そんな時、やっと意識が現状に追いついたのか、僕を見るなり、女性は悲鳴を上げた。

甲高い、女性特有の声。

先ほどまでの、凛とした声は何処へか。先ほどまでの、魅力は何処へか。

あぁ、何だ。そうか。そうなってしまうのか。

その瞬間僕の「　　」は、興味を失ったらしい。

「　　」の中で、目の前の女は最早、家畜と同じ位置にまで落ちた。

こんなものに魅力を感じてしまった「　　」は、きっとバカだと自分を嘲笑する。

もういい、こんなもの要らない。

「　　」がそう思った矢先、僕の目の前の女の首が、プロのフィギュアスケート選手の技のように、綺麗に、宙を、飛んだ。

手には、先程より少し多く、血がついていた。

僕の瞳からは涙が滴り落ちていた。

「心」を持つパーツを失った体は、バタリと音を立てて地べたに倒れ伏した。

僕は地に涙を落としながら、丁度足元に転がってきた首を、躊躇うことなく蹴り飛ばした。

いつものことだ、そう。人を殺せば悲しくなる。僕の意思でなくとも僕はそう納得した。

踵を返し、この部屋の出口らしき扉の場所へと歩いてゆく。

扉は案外、大きかった。

両手開きで、３ｍはありそうな扉だ。

僕は迷いなくそれを開く。ぐしゃぐしゃになった両腕の痛みが、少し気になった。

その先は、白だった。

だがしかし、そんなだからどうだというのだ。

こんなところからはさっさとおさらばしよう。

扉の先は見えないが、進まなければ意味はない。道がないなら作らなければ。

きっと「　　」を変える事は出来ない。

僕はゆっくりと、扉の外へと足を踏み出した。

瞬間、世界は右に１７５度傾いた。

第一話（後書き）

夕方６時をお待ちくださいませ。

第二話（前書き）

続きでございます。

お楽しみいただければ幸いで御座います。

第二話

傾いた世界は、深い、深い、闇に包まれていた。
どうやら、外には出ることが出来なかったらしい。
というのは、まぁ勘だけれど。
さきほどまでぐしゃぐしゃだった手は、いつの間にか元通り、人より少し華奢ないつもの物に戻っていた。

適当に、気が乗るままに歩いてみると、川に出た。向こう岸はかろうじて見える。
花畑があった。綺麗な、朱い花。その花は、どういう理屈か、死を思わせた。
彼岸花――というやつかもしれない。
川には、船が浮いていた。木で出来た、お粗末な小船。
ある意味当然といっては当然だけど、小船の上には一人、黒いフードつきのコートを着込んだ人が座っていた。

僕は聞いた。――船を出しているんですか？
フードを被った人は答えた。――あぁそうさ。あっちに魂を送り届けるのが俺の役目さ。

この人物、男だったようだ。
なんとなくだけど、僕は向こう岸に行かないといけない気がする。
僕はまた聞いた。――お金はかかりますか？
男は、抑揚のない声で答えた。――あぁ、無料（タダ）じゃない。六文だ。
ないなら服を置いていきな。

どうやらこの船頭の男、男色家らしい。僕だって、死んだとはいえ花も恥らう思春期の男の子だ。
こんな得体の知れない男に、自分の裸体を見せるわけには行かない。
僕は冷たい目で男を睨む。

お前さん、何か勘違いしてないかい？　男は呆れながら言ってきた。
何を？　わけがわからない僕は、男の質問に質問で返した。
はぁ、と船頭はため息を付いて僕に「乗りな」といってきた。

まさかこの男、船の上で僕をやらかそうとしているのではないか……。
そんなことを考えて、僕は一歩あとずさる。
んなことするわけねぇだろ、と男は少し苛ついた風にして、僕に怒鳴った。
まぁいいか、と僕は適当に納得して、小船に乗った。

やはり、僕は運が悪い。
小船に乗って数メートル進んだら、船が転覆した。

今度は、左に１７５度傾いた。

――――――――――――――――

目をあけるとそこは、部屋だった。
どこか、いいお屋敷の執務室か何かを思わせる、しっかりとした、いるだけで気を張りそうな造りの部屋だ。
前を向くと、恐らく執務用だろう机に、人が座っていた。
僕の気配に気付いたのだろうか、その人は書類から顔を上げた。
女性だった。綺麗な、とても、ものすごくどう形容していいのかわ

からないほど、綺麗な。
今は見ることが出来ないが、机の下まで続いているであろう、艶を持った赤いロングの頭髪。其れは奇しくも、先ほど見た彼岸花を――死を思わせた。
それと対比するように、病的なほどではないが、大理石と比べた時、大理石が劣ると言わざるを得ないほどの、白磁の如き白い肌。合歓木（ノキ）、その白が「創造」を思わせた。

瞬間、パチリと目が合った。
僕は、目が離せなくなった。
でもだめだ、魅力を感じてはいけない。僕はまた、殺してしまう。
僕は咄嗟に目を伏せた。

目の前の女性は僕の仕草を気にする風でもなく、気さくな感じで僕に問うてきた。

「迷子かな、少年」

その声は、母を感じさせた。僕自身、自分の母など知らないが、それでも、人間の本能なのか「母」という認識を、その声に持たせられた。

「らしい……です」

臆病な僕は、おどおどと答えた。

「ふむ……なるほどなるほど。こんなところに迷子で来れるなんて、少年はは中々運がいいかもしれない。どれ、少し待ってなさい」

運がいい？　冗談は綺麗さだけにしてくれ。僕の運がよかったら、

世界中、どこをスコップで叩いても水や石油が出てくるだろうさ。
そんな他愛もない事を考えていると、女性は椅子から立ち上がり、
僕の方へと歩いてきた。

「僕に……近づかないでください！」

咄嗟に、僕は怒鳴っていた。

「むむ、それはどうしてかな」
「貴女のような人が近づけば、僕は貴女を……殺して……しまう」
「なるほど……。まぁ、いいんじゃない？」

そんなことを言って、その人は僕に近づいてきた。
駄目だ――押さえ切れない……っ。
僕は俯いた。
ヒュン、と風を切る音。
その後にゴトン、と物が落ちる音がした。
だから、言ったのに。

僕の目からはまた、涙が滴り落ちた。
そんな僕の耳に、聞こえるはずのない声が聞こえてきた。

「危ない危ない」

えっ？　なんていう間抜けな声を出しながら、僕は顔を上げる。
目の前には、顔を俯ける前にも見た顔が、しっかりと胴体に繋がって、いた。

「わたしじゃなけりゃ、死んでいたね。少年はどうして、わたしを殺そうとしたのかな？」

くっ、と僕は息を溜め、やっとのことで声をだした。

「駄目……なんです。殺したくないのに……体が勝手に動く。まるで、操られてるみたいに」

「それは興味深い。二重人格？　いや、違う。もっと……そうだね。言うなれば、この行動は少年の「本能」、いや「魂」の持つ形なのかもしれない」

「つまり僕は……本当は人を殺したいと思っているんですか！」

いつの間にか僕は、声を荒げていた。

こんなに叫んだのは、いつ振りだろう。

でも、それでも、納得がいかない。

そんな僕に対して、女性は辛らつに告げる。

「そういうことになっちゃうの……かな」

嘘だ！

僕はそう叫びたかった。

でも、だけど、そうすることは出来なかった。

まるで、僕の「心」が、「魂」がその通りだ、と肯定するかのように僕の発言を許さない。

女性は、言葉を続ける。

「零崎って知ってるかな、少年は」

知らない、そう口に出したかったがショックでまだ言葉が喋れない。

「喋れないなら勝手に言うんだけど。

わたしはさ、下界のモノが結構好きなのよ。少年、孤児とからしいから知らないかもだけど、所謂サブカルチャーってやつ」

何で僕の事をしっているんだ。
そんな疑問が頭をよぎる。あと、サブカルチャーは知らないわけではない。とはいっても、少しだけど。

「それで、わたしのお気に入りの本の一つに戯言シリーズっていうのがあるんだけど、それには「零？一賊」っていう殺人集団が登場しているの。物騒よね。
その一族って、みんな「殺人」をすることに良心の呵責も、ストッパーもない。ただ人を「殺す」ことを「零崎」であるとした、集団。少年は言うなれば、出来損ないの零崎。意識を持って人を殺さず、意識の外で人を殺す。意識してるやつより始末が悪いのよね」

いつの間にか女性は、近頃の若い女性を彷彿とさせるような喋り方に変わっていた。
僕は饒舌に喋る彼女の言葉を、今はただ聞く。
それにしてもこの女性、何故ここまで自分を構うのか。こんな、得たいの知れない自分に。
そして何故だか、今はとても気分が落ち着いている。

「結論を完結に言わせて貰えばね、少年、あなた――
――狂っているの」

瞬間、僕の脳はストップした。
先ほどまでの安心感は消え、何も考える事が出来なくなる。

「星が、悪かったのよ」

星？
女性の言葉に、なんとか脳を動かす。
「ほらよく言うじゃない？　何とかの星の下に生まれた人間は、どんな運命を辿る、とか。少年は、そのなかでもデンジャラスな星の下に生まれちゃったの」
デンジャラスなんていう俗っぽい言葉を使われるとは思っていなかった僕は、自分の強張っていた体から少しずつ力が抜けていくのを感じた。
女性は僕から離れ、執務机までまた歩いていく。女性は机の上に、いつの間にか置いてあった資料を手に取ると、途端に優しい表情を悲しげな表情に変えた。
そんな顔をしたまま、女性はゆっくりと、僕に――近づいてきて、泣き出しそうになりながらも、言葉を紡いだ。
「結局、運が……悪かったのよ」
その言葉を聞いて、僕の中で何かがプツンと音を立てて、切れた。
「運……？　運って何だよ！　僕の人生、運のせいで滅茶苦茶かよ！　巫山戯んなよ！運が悪くて、星が悪くて……それで俺の人生バッドエンドかよ！　なんで……だよ……」
自分でもわかっていた。運が悪いという事自体。今まで「僕は運が悪い」って自分の中で無理やり納得してきたけれど、今、ついに溜めていたものが溢れ出してしまった。
情けない事も自分で理解できているし、それが八つ当たりだということも、頭のどこか冷静なところで分ってしまっている。

「ごめんなさい……」
女性は何故か僕に謝った。
何で？　どうして？　僕が悪いのに。
「何で……何で貴女が、謝るんですか」
「私がいけないの……私が、いなければ、こんなことには……少年はこんなところにこなくてよかったのに」
――え？
「さっき、ちょっと待ってて、っていったでしょ？　アレね、少年のこと調べてたの。調べて、それでわかってしまった。少年の、強制的に背負わされてしまった、咎を」
神様というものは、世界中に存在するあらゆる物を、一つ一つ情報をまとめ、書類化（ファイリング）しているらしい。
この女性は、突然の迷子である僕に興味をもったそうだ。
調べて、わかった答え。
僕が、何故ここにきたのか、その理由（わけ）。
僕が咎を背負う羽目になった、その所以（ゆえん）。
「少年の生まれた運命の星、それは私を示す星。破壊と創造。明けは創造、宵は破壊。その中間は、わからない。少年が生まれたのは、何が起こるかわからないパンドラの時間。中に入っているのは災厄か、はたまた平和か。残念……いえ、不幸中の幸いというのかしら、少年が貰ったものは、両方。平和を希求し、その中で破壊を振りまく。そう、少年の星は――――」
――――シヴァ。

続けられたのは、鳥のささやきの様な小さな呟きだったが、僕の耳には、確かに届いてしまった。

「ごめんなさい……」

女性――ヒンドゥー教の破壊神シヴァ――は、懺悔の様に、小さく、肩を震わせながらもう一度、そう呟いた。
僕の目元からは知らず、涙が溢れ出していた。

「でも……あなたのせいじゃ、ない」

涙が出るのを無理やり無視し、そうとだけ言って、僕はこの荘厳な部屋の入り口に向かって歩き出す。

「――どこに行くの」

シヴァは僕に問うてくる。
僕は、先ほどのシヴァの懺悔の声の様に小さく呟く。

「どこか。僕は行かないと。何かしていないと、僕はおかしくなってしまうから」

それは偽る事のない本心だ。
この場を離れて、何かしていないと今にも心の中の何かが瓦解して、壊れたダムに押し寄せる水の様に、何もかもを飲み込んでしまう、そんな気がしたから。

「そう……。なら、これをあげる」

シヴァは何もないはずの空間に手を突っ込み、何かを取り出すと、

僕の方に放って来た。
シヴァが僕に投げ渡してきたのは、細長い棒状のモノが入った袋だった。

「これは？」

なんの気なく、僕は簡潔に聞いた。
あっちに言ったらあけて、そうとだけ言ってシヴァは机の椅子へと戻っていく。
僕はまた簡潔にありがとう、とだけいって扉へと歩いてゆく。
扉はまぁ、普通のもので身長は２ｍもなければ屈んだりなどする必要はなさそうな、一般家庭にもあるようなものだった。

「さようなら」と僕は、既に机で書類と向き合っているシヴァへと呼びかける。
するとシヴァは書類の方を向きながらも、「さようなら」と返してくれた。

扉を開けてみるも、そこには何もなかった。
なんだ、と拍子抜けしたわけではないが、特に何もなかったことで安心するわけでもない。
僕は迷うことなく、何もないところへと、足を突っ込んだ。

本日三回目の、感覚。
世界は、今度は３６５度ほどずれた。

僕の意識が消える瞬間、シヴァの声が聞こえた気がした。
聞き間違いでもなければきっと彼女は、こういったと思う。
――頑張ってね、私の息子。

僕は心の中だけででも、答えた。
――ありがとう――母さん。
僕は意外と、母性に甘えるタイプだったようだ。
そして僕の意識は、完全に掻き消えた。

第二話（後書き）

next A, M 0 o' clock

第三話（前書き）

今日はもう明日。

楽しんでいただければ恐悦至極で御座います。

第三話

目を開いて最初に理解できた色は、白。ただ、それは気を失う前に見たような全てを覆い尽くすような白じゃなくて、やさしい絹のような白だ。
どうやら、今度はちゃんと現実にでてこれたらしい。

それにしても、だ。
ここは？
ここは、そう――。

「何処だ？」
「おや、目が覚めましたか、お客さま」

流暢な、訛を感じさせないお手本のような英語だ。
そんな声がした方を見れば、何処かで見た顔。つい最近、それも1時間以内に見たような気がする。
あぁ、そうだ。思い出した。あの女性に――シヴァに、よく似ている。瓜二つ。いや、これほどの美貌を持つ女性たちを、瓜などにあてはめていいわけがない。言うなれば、華だ。「花」ではなく、より美しさを強調した、「華」。
違うのは髪の色だ。朱ではなく、とても……とても綺麗な、純正の「金」も眩むほどの金髪。
その女性は優しい、母――シヴァ――を幻視させるような目で、僕を見ていた。
そんな真っ直ぐな目に、頬が赤みを帯びてしまうのを感じて、咄嗟に顔を伏せてしまう。

「ここは、何処でしょうか」
「ここはしがない貴族の屋敷です」

俯きながら僕が昔身に着けた、ちょっとぎこちない英語でそんなことを聞くと、女性はまた、綺麗な声でそう答えてくれた。
やっと気付いたけれど、どうやら僕はベッドに寝かされているらしい。生前――といっても、僕にとって何時(いつ)が生前で生後なのかは曖昧だから、今の状況をどう定義していいのかわからない――感じたことのないような暖かさと柔らかさから、高い物なのだろうということはわかる。
貴族の屋敷だといっていたし、見たことは無いが高価なものもたくさんあるのだろう。
ふと、手元に違和感を感じ、高価そうな毛布の中から腕を出す。腕には、シヴァに貰った物をしっかりと握っていた。

「あぁ、それですか。あなたを寝かそうとした時にとろうと思ったんですが、どうにも手から離れなくて。まるで、形見か何かの様に握っていらっしゃって。ふふっ」

女性はそういって小さく笑った。見ていなくとも、その様子が簡単にそうぞうできてしまい、また少し体温が上がったのを感じた。
それにしても、気絶しながらも離そうとしなかったのか、僕は。形見――か。云い得て妙だが、ある意味、それに近いものかもしれない。

そんなことを考えていると、コンコンと、ドアをノックする音。
誰かがドアの前にいるのであろうという事はわかったが、それ以外に僕は「違和感」を感じた。
――「気配」がなかった。
この部屋の前まで歩いてくる音さえもせず、ノックという行動を起

こすその時まで気配を感じることが出来なかった。
これでも、少しは――いや、少しじゃないか。
別に自慢したり誇ったりしたいわけではないけれど、というか寧ろ自分としては嫌なくらいだけど、僕は生来そういったことには敏感だ。
女性はそんな僕のふうには気付いていないようで、先ほどまでと同じ優しい声で「どうぞ」とだけ言うと、扉が開き男が一人室内に入ってきた。
背の程は１８０くらいだろうか、少し細身であろう体躯からは、大きさを多大に感じさせるも、威圧感や迫力といったものは感じさせない。消しているだけ、なのかもしれないが。
ピシっと伸ばした背筋に、黒い一昔前を思わせる執事服。
その上に乗る顔からは優しい雰囲気が漂い、その双眸をレンズ越しに覗かせる眼鏡からは愛嬌さえも感じることが出来る。

だが、僕が見るのはそこではない。
――見ただけで、わかった。
僕の「本能」が頭の中でけたたましい警鐘を鳴らす。
こいつは――本物だ。

ぞくぞくと、「本能」が僕の体を蝕んでいこうとしているのが、感覚でわかる。
――落ち着け。落ち着け。と心の中で念じるように只管(ひたすら)に繰り返す。

「奥様、お嬢様がお帰りに――おや、目を覚まされましたか、御客人」

男は気のよさそうな笑みを浮かべているが――違う。この笑みは作り物だ。
見る人、分かる人が見れば、一目で感じることの出来る「違和感」。

佇(たたず)まい、距離の取り方、どれもこれもわざとらしいほどに完璧。精巧に作りこまれた「偽者」だった。

確実に、時間とともに「本能」が侵食していく。――が、その変化は一向に訪れない。

――何でだろう。

侵食が完了する直前までは確実に進んでいるはずなのに、その先……つまり、体の主導権が何時まで経っても奪われない。

「えぇ、今お起きになったところでして。それでガエターノさん、娘が帰ってきたそうですね」

「はい。もうすぐ此処へいらっしゃると思いますよ。御客人のことが大層気になっていらしたようで――おっと」

男――ガエターノと呼ばれた人物が言葉を言い切る前に、その脇から、金色のヤギが――いや、見間違えだった。

飛び出してきたのは、少女だった。

僕の隣にいるおっとりとした女性をそのまま幼くした様な、可憐な金髪の少女。恐らく、母子(おやこ)だろう。

僕の「心」がドキリ、と跳ねた。

シヴァや、目の前の女性に感じたものとは少し違う、初めての感覚。どうしてか、その初心(うぶ)な感覚は僕の「本能」を宥める様にして落ち着かせてくれた。安心感、それが「心」を満たす。

――子どもというのは、人の心の動きに敏感だということを聞いたことがある。

そんな僕の様子に気がついたのか、いつの間にか僕の寝るベッドの上に乗り覗き込むように、心配するような顔で僕を見ていた。

「こら、エヴァンジェリン。お客様はまだ起きたばかりなのよ」
「はは……大丈夫ですよ。子どもは、好きですから」
「うちの子がすいません」
厭(あ)くまで、「表で出ている僕」は、だが。
エヴァンジェリンと名を呼ばれた少女は、ちょうど僕の膝の上辺りにちょこんと、両足で僕の膝を挟み込むようにして座っている。
その眼(まなこ)は、まだ僕の目を真っ直ぐに見つめていた。
「お客様はそう言ってらっしゃるけど、エヴァンジェリン、いい子だから降りなさい」
「だってね、お母様。この人、とっても寂しそうな目をしてる」
「――っ」
――子どもは、鋭い。人があまり知られたくないことを、過敏に感じ取る。
それを、遠慮なく、堂々と、口に出してくれる。
「大丈夫……です。エヴァンジェリンちゃん――だったかな、いいよ。そこにいて」
「本当？　ありがとっ！」
子どもらしい、純真無垢な満面の笑み。その笑顔にまた、ドキンとする。
「それでは少し、お話でもしましょうか。貴方がここに来た経緯(いきさつ)は、記憶におありでしょうか」
「いえ。……何も」
「でしょうね。貴方はそこの森でその子……エヴァンジェリンが、お倒れになっているところを見つけました」

女性が指差す方を見ると、小洒落た窓の向こう、鬱蒼と生い茂る森が見えた。夜道を一人で歩けば、何か見えてしまうんじゃないかと思うような、おどおどしい雰囲気を持った森。
どうやら僕は扉をくぐった後、あの森の中にでたようだ。
女性は説明を続ける。

「娘が走って私のところにきたときには驚きました。とっても忙(せわ)しい様子でいうんですよ。森に生き倒れがいる、早くしないと死んじゃうって。この子はいつも落ち着きがないんですけど……その時は特に。私もこれは一大事だと思いまして、息せき切って走っていったんですよ。そこのガエターノさんと一緒に」
「私(わたくし)も驚きました。お嬢様が私と奥様の服の裾を力いっぱい引っ張られて」

男のしみじみと語る風は同情を誘わせるが、僕は警戒を解かない。この手のタイプは警戒しすぎても警戒しなさ過ぎてもいけない。丁度いい程度に注意しておかなければ、足元をすくわれる。

「娘に引かれるままに進んでいけばまぁ、驚きました。まるで死んでいるかのように人が気絶しているじゃありませんか。大急ぎでこの屋敷までガエターノさんに運んでもらいました。此処に来るころには貴方はもう真っ青で、血が通っていないかのようで心配したのですが……見たところ、大事なさそうでよかったです……」
女性は目を覚ました時に見たのと同じ、優しい、母を感じさせる笑顔を向けたきた。

「ああ、そういえば名前をお教えしていませんでしたね。私の名前はデエス・N(ノートル)・D(ダム)・マクダウェル。娘はエヴァンジェリン、そして

我が家で執事をやってくださっているガエターノ・ヴァレッティさん。それで――貴方のお名前を、お聞かせいただいても？」

――名前。名前には力が宿るという。いや、「縛り」に近いものか。名前はそれ自体にその「名」を持つモノを縛る力を持っている。その人の人となりや人生を決める最初の何割かは、それによって決まると言っても過言ではない。

ならば僕の生前の名前は何だったか。記憶を探ろうにも、出てこない。思い出せない。いや、思い出したくないだけなのかもしれない。自分で自分の記憶に鍵をかけて心の奥底にしまってしまったんだろうと、適当な当たりをつける。

では――今世ではどうしようか。

自分で決めるべき、なんだろう。誰も僕の名前を決める事の出来る人はこの場にはいない。

ならば、そうする他ない。

そんなことを考えていると、ふと、一つ思いついた。

まるで元から決めていた――いや、決まっていたかのように、口から出ていた。

「……優織（ゆうしき）、哀川優織（あいかわゆうしき）といいます」

――僕は、僕の運命は――僕を変えることが出来るのであろうか。

――この柵（しがらみ）から解き放ってくれるのだろうか。

――どうなるかわからないけど、僕は……前に進むしか、ないのだろう。

そうして、僕の奇怪で奇妙な第二生が始まったようだ。

第三話（後書き）

少し短いですね。

next. P，M 6 o' clock

第四話（前書き）

夕方です。

楽しんでいただけるかなぁ。

第四話

この光景を一言で表現しようとすることは、きっと、叶わない。

一面に広がる森の中でひときわ目を引く、切り立った崖の上、女はその真紅の髪を靡かせる。

真紅の中に、稲妻を思わせる黄色のメッシュの様なものが目を引く、前衛的な髪型。

目を引くのはその特徴的な髪型だけではない。

髪色に合わせるような、真赤なワインレッドのスーツ。

そして、あまりにも常人とかけ離れた……圧倒的なプロポーション。

ただ……目つきは、異様に悪かったが。

知る人は知る。

知らぬものは、裏の社会では行きぬくことは難しい。裏社会において情報とは、己が運命を最も左右するからだ。

人はこの女のことを、こう、言う。――否、「こう」ではなく「これら」の名で言う。

《人類最強の請負人》、《赤き征裁》、《死色の真紅》、《疾風怒濤》、《一騎当千》、《赤笑虎》、《仙人殺し》、《砂漠の鷹》、《嵐の前の暴風雨》

そして――

《人類最強》、と。

知らぬ一般人が見れば、こう言うのだろう。

「美しい」、と。

ただ、この女の本質をある程度理解している少年――いーちゃんと

呼ばれる少年は、露ほどにもそんなことは思わないのだろう。
そんなことを考え、女は苦笑する。

ふと、女は此処に来た経緯を思い出した。
それは唐突だったが、いつものことだった。
依頼、女の元に訪れたのは一つの依頼だった。
「少しばかり、息子を助けてやって欲しい」、要約するとそういった内容だった。
内容を理解した直後はそれこそ、興味を持つ事は愚か、やろうなどとは考えなかった。――が。

興味が湧いたのは、唐突だった。
女のところに、一人、訪ねてきた。それこそ自分でも見惚れてしまうくらいの、絶世の美女が。
話を聞けば、件の依頼を出した人物だそうだ。
そこで女は気付く。何故今まで不思議と思わなかったのか、「不思議」だと思うくらいに、不思議なことであった。
女は長期間特定した住処(すみか)を、基本的に持つことはない。依頼を出すには、会いに行くしか方法はないはずだ。
それがどういうことか、この目麗しい女に合うのは、初めてだ。
ならば如何してどうやって如何様にして、依頼は女の下に無事届く事が出来たのか。
変装？　そんなものもわからない自分ではない。
他人に行かせた？　自分のところに「いーちゃん」以外がいるのは随分と久しぶりなはずだ。

女は俄然興味が湧いた。自分の、理解の及ばない場所。
《人類最強》の名は伊達ではない。
自分――人類が理解できない場所に位置する存在など、ある程度絞られる。

そしてこの美貌だ。推理小説は嫌いだが、女は自分の勘には自身がある。一応だが――《探偵》の肩書きも持ってはいた。
十中八九、この女性は神――或いは、それに準じたモノであろう、いや、きっと神だ。女は自分の「勘」を信じた。

案の定――というより、当然の結果だったというべきか。
女性は何のけなく、暴露したのだった。「自分は、神をやらせていただいています」なんて風に。
それには流石の《人類最強》も目を丸く――はしなかったのだが、それでも、大層驚いた。
神というのは、随分と気楽なんだな……だなんて考えるくらいには落ち着いていたわけだが。
女性本人から聞かされた内容は、先に聞いていたものと大差はなかった。
何故わざわざ出向いてきたんだと聞けば、優しいお釈迦様のような笑顔で「私がこなければ、きっと貴女は依頼を受けてくれなかったでしょうから」と。
お見通しか、と心の中で舌を1寸ほど巻いた。

女は依頼を受ける事にした。理由は簡単。興味を持った――いや、少し違う。「匂い」がしたからだ。
それも、自分の一等好きな、陳腐だけど爽快な物語（ストーリー）が起こる「匂い」が。
見てみたいとも思った。
それほど長い期間とはいえないが、自分が師事し、生き方を教える人間がどれほど成長せしめるかを。

そこまでで、女は考えるのをやめた。
これではまるで自分が年を取ってしまった様ではないか、なんてことを思ったからだ。

――いや、そもそもその思考にいたること自体が年寄りくさい――って、泥沼じゃねぇか。
女は内心で自分に突っ込む。

少し時は立ち、女は落ち着いたのか、スポーツ選手の様に、というよりは、喧嘩前にやるような首を回したりといった――準備運動、らしきものを始める。
最後に大きく伸びをすると、女は何の気なしに――崖から飛んだ、飛び降りた。何の躊躇いも見せず。
これをみていた人間がいたら両手で顔を塞いだかもしれない。
だが、女は大した事無いとばかりに、腕も何も動かさず、ただ地球の重力に従って自由落下を続ける。
真赤な髪と、真赤なスーツが引き立ち、さながら、その落ちていく姿は真赤な龍を思わせた。

正に地面にぶつかる、その直前、女は見事に空中で一回転を決めると、スタリと立った。
あまりに呆気なく、当然とばかりに、スタリと。

「――さぁて、行くか」そんな呟きは、森の木の一つに反射して、その場所に帰ってくるときには、女の姿はそこになかった。

――この女、名を
哀川（あいかわ）、潤（じゅん）。
――人は彼女を
《人類最強》と、呼ぶ。

――――――――――――――――

目を開いて最初に写るのは、最早いつも事となった、豪奢なシャン

デリアだ。

――この家に身を置いて、数年が経った。

保護してもらったその日、僕は考え込んだ。
なんといっても、行くところもなければ、この世界の事もからきしわからない。
出来れば、安定した宿と、食べ物が欲しかったが、そうそう見つかるとも思っていない。
とはいっても、いつまでも世話になるわけにはいかない。
その日一日だけ泊まらせてもらい、宛てもなく出て行く気だったのだ、が。
嬉しい誤算だった。
この屋敷の事実上の家主である、デエス・N・D・マクダウェル。
彼女はこの家に住まないか、と、そう僕にいってきた。
当たり前ながら、僕は最初断った。
稼ぎ口も、何も、何もかも、僕は持っていない。
そんな人間、邪魔以外の何者でもないだろう。
だから断ったのだが。
どうにも、エヴァンジェリンちゃんは、僕に懐いてしまったらしい。
考えている間も、僕の寝かさせて貰っているベッドの上で僕の事をずっと見つめていた。
これでは、断固として断る事が出来ない。それほどの威力（もの）なのだ、子どもの無垢な笑顔というやつは。
そんあわけで、なし崩し的に僕はこの屋敷にお世話になる事になった。

もちろん、ただ飯などは僕の感性では到底許容できるなかったので、無理を言って屋敷の雑事を手伝わせてもらっていた。
とはいっても、それだけが理由というわけではない。

何故か、気にかかるのだ。
執事をやっているという男――ガエターノは、何処か信用ならない。
この男が近い未来、何かするのではないか――いや、する。絶対に、する。
少しばかり癪ではあるが……「　　」は、役に立つ。やはり、果てしなく、とてつもなく癪ではあるのだが。
数年間の間、隙を見せれば「　　」のままに殺してしまおうと、そう思っていたが、やはりというか、隙がない。
それに、例え隙を見せて「　　」に全てを委ねても、何故か自信がもてない。――自信など、持ちたくもないが。
もし仮に、殺すことが出来たとしても、「その後」だ。
当然ながら、今の僕に「　　」を解き放って、それを飼い慣らすことなど、できないだろう。
そうすればどうなるか。……単純な事だ。あの二人も確実に巻き込み――殺してしまう。
そんな風なことを考えていると、やはり時間は待ってくれないというのがしみじみとわかる。早、3年だ。
でも何故か、この3年間、一度も「　　」が表に出ようとはしてこなかった。
シヴァに貰ったアレか……それとも、あの子のお陰か、それは僕にも、ましてやあの子にもわからないだろう。

3年経った今でも、相変わらずデエスさんは優しい笑顔でゆったりと過ごしている。
生活物資は月に一度、ガエターノが買ってきている、らしい。
「らしい」というのは、見たことがないからだ。三年間、約72ヶ月、一度たりとも見たことがない。
僕の疑いは、日に日に強まるばかり。
会った当初7歳だったエヴァンジェリンちゃんは、今年で二分の一

成人の１０歳。
今年、といったが、厳密に言うと、「今日」だ。
嫌な予感は、さらに現実味を増した。
あまりにも、タイミングがよすぎる。――気がするだけ、ではあるが。
デエスさんに聞いたところによると、今日は月に一度の買い込みの日だそうだ。
この屋敷の立つ森は、やはり広大なようで、一番近いある程度整った町に行くのに、徒歩で片道４時間はかかる。僕も一度だけ、いったことがある。
どうやって一か月分、それも４人分もの荷物を、徒歩で持ってきているのか、わからない。
車なんてものはない。
謎は深くなるばかりだ。

そこまで考え、ベッドから上体を起こし、大きく伸びをする。伸びと一緒に、ふさりと髪の毛も持ち上がった。
屋敷の部屋の中でも、二階の一番右の突き当たりの部屋、僕はそこで寝泊りをさせてもらっていた。
この部屋は昔、デエスさんの夫が書斎として使っていたらしいが、当の管理人たるその人は、僕の来る５年前、謎の病に罹（かか）り、帰らぬ人となったらしい。
この書斎、よっぽど太陽に気に入られているのか、朝日が部屋一面に入ってくる。
お陰で毎日、すっきりと寝起きする事が出来ていた。
足を布団から出そうとすると、少し重みを感じた。またか、と思い布団を捲ると案の定、そこには金色の少女がスヤスヤと寝息を立てて眠っていた。
起こすのも可哀想なので、出来るだけやさしめに頭を撫でると、少女はうぅん、と小さく声を出してまた寝息を立て始めた。

ゆっくりと、起こさないように布団から足を出し、立ち上がる。
もう一度伸びをすると、後ろ髪からぴょこりと跳ねた一房が頬を擽(くすぐ)った。
寝る前にもう少し乾かせばよかったか、なんて、今更遅い、か。
とりあえず顔を洗って髪を梳かしに――と、忘れるところだった。

僕はベッドの横に立てかけてある、シヴァに貰ったアレを掴む。
シヴァに貰ったこの謎の物体だが、3年経った今でも云とも寸とも言わない。
どころか、袋から出すことも出来ない。
この袋、一体どういう仕掛けになっているのかと思って、中身の出るであろう場所を留める紐をみて見ると、謎の文字が編み込まれていた。当然ながら読むことは出来なかったが。
きっと何かおまじないのようなものだろう、なんていったって、神様がくれた物なんだから。

その物を持ちながら、ゆっくりと一階への階段を降りて広間へといくと、既にデエスさんは起きていた。
不思議な人だ。
いつも、僕や誰よりも早く起きて、広間でまったりと外を見ている。
3年間、ずっと、毎日、欠かさず。
やがて僕が起きてきた事に気付いたのか、こちらを向いた。

「おはようございます、優織さん」
「えぇ、おはよう御座います。デエスさん」

いつもと同じように朝の挨拶を交わす。
ふとみれば、おかしなことに、デエスさんはいつまでも僕の方を見ている。
いつもは挨拶をして二コリと笑ったあと、またすぐに目を外に向け

てしまうのだが、今日は違った。
――3年間、曲がりなりにも一緒に暮らしてきて、初めて、というのは些か違和感を感じずにはいられなかった。

「どうかなさったんですか、デエスさん」
「あ、いや。どうしてかしら、今日の優織さん――いえ、なんでも……ありませんでした」

おかしな人だ。「オカシイ」という意味ではなくて、変な、という意味で。

「……そう、ですか。では、僕はこれで」
「はい、今日も一日よろしくお願いします。――あぁ、そうそう。今日の夜はエヴァンジェリンの誕生パーティをしますから。ふふっ。といっても、4人ですが
「えぇ、わかっています。それでは、今日も一日お仕事させて頂きます」

それだけいって、僕は顔を洗いに外の噴水に向かった。

――この時に、僕は気付いていればよかったんだ。
――「3年間で初めて」という違和感の正体に。
――その日の、オカシさに。
そうすればきっと――あんな事には、ならなかったんだから

第四話（後書き）

ねくすと。えーえむぜろおくろっく

第五話（前書き）

というか見ている人がいるかどうかも怪しいですね。

楽しんでいただければ嬉しい限りです。

第五話

「え？　えぇっと……もう一回、お願いします」

午前の雑事を終え、昼食を摂りながら昼休みを満喫していると、デエスさんに話しかけられた。
その内容が突飛で、つい聞き返してしまったと、そういうわけだ。

「買出しに、いってきて欲しいんです」
「僕が……ですか」
「お願いします」

何でも、先月かって来た分の保存食が意外と残っていて、今日は大量に買いにいく必要はないらしい。
そして今日はエヴァンジェリンちゃんの誕生日だ。
先月買いに行ったとき、どうやらガエターノはそのことを失念してプレゼントやらを買ってくるのを忘れたらしい。
当のガエターノは、どうもすいません、といいながら頭をかく。

「それに、優織さんの方が娘の欲しいものがわかりそうですし」
「お嬢様はいつも優織さんと一緒にいますからね」
「……」

まぁ、そうかもしれない。
エヴァンジェリンちゃんはいつも僕について回っている。
危ないといっても、行くとこ来るとこついてくる。
今は食後のお昼寝を満喫しているだろうが、起きたらきっとまた僕のところにくるだろう。

「優織さんがいない間は私目が責任を持ってお嬢様を見ていますから、大丈夫ですよ」

――アンタが一番怪しいんだ。その笑顔が、その挙動が。
今は人畜無害な顔をしているが、警戒は解けない。
だけど、ニコニコと、僕の返事を待っているデエスさんの顔を見て、僕は仕方なく折れた。

「ふぅ、分かりましたよ」
「本当に、ありがとうございます」

屈託のない、無垢で真っ直ぐな笑顔。
やめてくれ、そんな笑顔を向けられると、直視できなくなってしまう。
僕は恥ずかしくて、つい顔を背けた。

「では、買ってきていただきたいものはこれに書いてありますので、宜しくお願いします」

そういって、ガエターノはお金と必要なものを書いた紙を渡してきた。
この時代の通貨価値というものはよく分からないが、恐らく大金だとは、思う。
貴族だし、お金は結構あるんだろう。

いろいろと準備をして外に出ると、陽は西へと傾き始めていた。
急がないと、夜の誕生パーティに間に合わない。

僕は、深い森の中を颯爽と駆け出した。

――――――――――――――――――――

走ったお陰で、考えていたよりだいぶ早くついた。
帰りも同じペースでいけば、きっと間に合うだろう。
そんな考えを浮かべ、僕の心にささやかな余裕が生まれた。

これなら少しは見て回れるかな。
僕は久しぶりの人ごみに、心躍らせ、街へと入っていった。

町は前に来たときと同じく、活気が溢れていた。
入り口の警備の人に軽く会釈をし、町へと足を踏み入れる。

大通りには商店街のように、左右に店が軒を連ね、売り文句が飛び交う。
生前では味わえなかったものだった。
機会がなかったのではなく、僕はこんなところに足を踏み入れられるような、そんな体ではなかったからだ。
でも今は違う。「　　」は鳴りを潜め、僕はただの「人」としていられる。
こんなに嬉しい事はない。僕はゆったりと、味わうようにして店々を眺めながら、歩を進めていった。

――つまり、僕はこの時から油断してしまったのだ。
油断してはいけない、警戒を解いてはいけないと、幾度も自分に言い聞かせてきた相手に対して、警戒を無くしてしまった。
即ち(すなわ)それが、僕の敗因だったのだ。

――――――――――――――――――――

町を歩いていると、様々な人を見かける。

商売に生きがいを感じ、商品の宣伝を大きな声でしている人。
そしてそれに引き込まれ商品を手にとって見るお客。

ただ、あるのは明るいところばかりではない。
店々の隙間の裏通りをみると、骨が見え、ミイラのようになった人間もいる。恐らく、飢餓だろう。
光あるところ闇があり、日が当たるところがあれば影が出来る。
そんな「現実」の凄惨さを肌で感じた。
この時代、きっと僕の世話になった程度の孤児院すら有りはしないのだろう。
力なく、親もないものはただ人知れず死んで逝くだけだ。

そんなことを考えながら町を歩いていると、一角、町の中心部に近い場所で喧騒が巻き起こった。
興味本位で、人の壁の間を通り抜け、騒ぎの中心の場所まで行くと、その行為を理解する事が出来た。
人の壁はその中心部から２ｍほど離れたところで止まっていた。
喧騒の中心は、二人の男と、一人の少女。

男等は少女を囲み、何か喚き散らしていた。
訛りの酷い言葉でなにをいっているかよくは分らないが、ニュアンスから大体何を言っているかは察する事が出来た。

――魔女狩り。
魔女だといわれたものは、殺されてしまう。
殺されなくとも、民衆の中心で魔女と言われる辱めを受ける。
異端審問とも。
歴史上でこの魔女狩りにおいて亡くなったとされる人数は、数万にも及ぶと聞いたことがある。
そのうちの何人が魔女だったのか――いや、魔女はそもそもその中

にいたのかすら、定かではない。
それが、目の前で起こっていた。
少女は既にぼろぼろで、男達から暴力を振るわれたという事はありありと理解する事が出来た。
「うっぐ……ひっぐ。わたしは魔女じゃ……ないです……よぉ」
泣きながらも少女は訴えるが、男たちはその涙を見たからか、一層その醜い顔を歪めた。
あぁ、だめだ。
こんなものを見てしまったら、収まっていた「　　」が……。
動悸が早まり、血の流れが加速していく。
瞬間、カタカタという音を立てて、適当な紐で肩にかけておいたシヴァに貰ったモノが、揺れた。
ふわりと、一瞬の浮遊感が体に起こる。
その浮遊感がなくなった頃には、動悸も血流も、いつもの様にゆったりとしたものに戻っていた。
そんなことをしている内に、話が纏まったのか、男は僕を含めた聴衆へと向かい、声を荒げた。
「見ておけよ、てめぇら！　魔女はなぁ、こうなるんだよ！」
男は、その手にもった大きな斧を、咽び泣く少女へと振り下ろす。
ドスン、と大きな音を立てて斧は地面に突き刺さる。それは少女の死を暗に示していた、はずだった。
突如、そこに稲妻が奔（はし）った。
――違う。

稲妻のように見えたそれは人間だ。見紛うことなく、正真正銘の人間。
その人間の奔ったであろう道にあった男の腕は、数メートル後ろに斧ごと突き刺さっていた。
人間は、さも面倒そうに、呟いた。

「あぁ。……ったく、これだからこの時代は好きじゃねぇんだ。辛気臭いったら、ねぇ」

僕はどうしてか――そう、面倒くさそうに言った人間をよく見ることなく、人の壁の隙間を縫って逃げ出した。
驚いたからだとか、そういう理由ではなく、この人がこわいと……何故か、そう思ったから。

そういえば――日本語は、久しぶりに聞いたな。

――――――――――――――――

稲妻は、人の間を縫うようにして逃げ出した少年の後姿をぼんやりと、見つめていた。

――――――――――――――――

不振におどおどとしながらも、頼まれた買い物を続ける。
まだ気が気でない。
恐らく、先ほど魔女狩りに割り込んできた人物はまだ町の中にいる。
――出来れば目を合わせたくはない。そう思った。
本当に、このモノですら抑えきれないと、そんな予感がした。
頼まれていたものは粗方購入する事が出来た。

足りないのは……あぁ、危ない。
食料やパーティの用具は買い込んだが、大事なものを見落としていた。
エヴァンジェリンちゃんへの、プレゼントだ。

なにかいいものはないかと思い辺りの店を見回してみるとふと一軒、目に留まった。
小さなアクセサリーショップだ。
僕はゆっくりと、人の波をよけその店へと向かう。
店頭に並べられていたのは、十字架をモチーフとした、ネックレスや指輪。
宝石などはついてなくて、煌びやかとはいえないが、何処か職人の気質を感じさせ、一度見れば忘れられないような、そうな迫力があった。
ふと違和感を感じた。
――何故、町行く人はこの店に目をくれないのだろうか。これほどのモノが揃っているというのに。

「ここは、魔女が店をやっているからよ」

ビクリと、反射的に肩が動いてた。
少し警戒心を持っていなかったという事もあるが、まるで気配を断っていたかのように、いつの間にかそこに人がいた。
目深くフードを被っていてその顔は見て取る事は出来ないが、不思議な魅力を感じる。声から察するところ、女性だろう。
それにしても魔女――魔女といったのか、この人物は、確かに。
こんな魔女狩りが横行するような時代に自分から魔女を名乗るなんて、不自然極まりない。
何か理由があるのだろうが、そこに僕が関与する意味は、きっと、ないだろう。

「……綺麗なアクセサリーですね。これは貴女が？」
「そうだけど……。あなた、変な人ね」
「変？　僕がですか？」
「えぇ、そう。私が自分で魔女っていったのに、あなたそれについて何も言ってこないわ。……こんな時代なのに」
「あぁ、なるほど。とはいわれましても、貴女が魔女かどうか、僕には関係はないもので」
「……やっぱり、変な人ね」

そう変な人を連呼されても嬉しい気持ちはしないし、そういったことを言われて嬉しい気持ちを持つ変態的な性的嗜好は持ち合わせていない。
それで店の主人らしき女性との会話は終わり、気にせず僕は品定めを始めた。

数分ほど経っただろうか、僕は一つの商品に狙いを定めた。
銀のロザリオのついたネックレス。
素朴でオーソドックスなものではあるが、他の商品とは一線を画すような意託を感じさせる。
所謂、職人の本気の品である。
僕は品定めの様子をじっと見ていた女性に、声を掛ける。

「これを頂けますか？」
「あなた……中々いい目をしてるわね」

女性は驚いた風だ。どうやらこの品は当たりだったらしい。
褒められた僕は、つい照れてしまう。

「そ、それはどうも」

「いいわ、売ってあげる。お代は……そうね。――タダでいいわ」

タダ……？

この人は今タダといったのか。

――タダより高いものはない。

そういう言葉を聞いたことがある。

何か条件を出されるのではないか――そんな不安が僕の頭をよぎった。

「……何よその目は」

「い、いや、何か要求されるんじゃないかと思いまして」

「何？　あなた、何か要求して欲しいの？　体とか？」

「え？」

一瞬、意識がフラットになった感覚がした。

女性は頬をぴくつかせている。

「……何マジな顔になってんのよ。冗談に決まってるでしょ？」

「び、びっくりしましたよ」

「あぁ……でも、うん、そうね。条件、やっぱつけるわ」

――藪蛇、というヤツをやってしまったらしい。

一体どんな条件を付け加えてくるのか、密かな期待と、多大な不安が募る。

身構えている僕に対して、女性が出した条件は、気が抜けるほど簡単なものだった。

「今度からこの町にきたら、寄ってくれるだけでいいから、来てくれない？　お客さんも来ないし、ちょっと、暇なのよ」

――客がこないのは自身の所為だという事は言わない方がいいのだろうか。
いや、きっと自分ではわかっているんだろう。きっと何か理由があるんだろう。
だけどやっぱり、それは僕には関係のないことだ。
とはいっても、ここで逢ったのも何かの縁かもしれない。
僕はわかったとだけ言い、ネックレスを念のため首にかけ、店を離れた。
去り際、一度後ろを振り向くと、女性が手を振ってきた。僕も控えめに手を振ると、女性はフードの下でニコリと笑い、店の奥へと消えていった。

――この時既に世界のズレは始まっていた――

第五話（後書き）

お次は夕方六時ですね。

感想とか頂けると嬉しいです（´д`）

第六話（前書き）

楽しんでいただけたら……その――うれしい、です。

第六話

嫌な予感がした。
プレゼントを含めた買い物を済ませ、まだ余裕はあるなと考えながら森の中を歩いていた時の事だった。
コワイ――怖い――恐い――たまらなく、恐ろしい予感。

――屋敷で、何かあったのか……？

「――あっ」

僕はこの時、重大な――とてつもなく、とんでもなく重大なミスにやっと、気付いた。
なんて――バカなことを――っ！
「余裕がある」だと――？
「まだ大丈夫か」だと――？
そんな余裕なぞ、ないはずだったのに――！
自分を殺してでも足りない――そんな撒き散らす事の出来ない怒りは、僕の「心」を蝕んでいく。

僕は只管に速く駆けた。
正しく疾風（ハヤテ）の如く、目標の場所へと。

――危機、だからだ。そう、家族の。

――――――――――――――――

1時間ほどかけて、やっとのこと目標点――屋敷へと、辿り着いた。
見たところ、いつもと変わりのない静かな屋敷だった――が、違う。

そこにあるのは違和感。
ずれこんだような、明確な、果てしないほどの、違和感。
僕はゆっくりと屋敷のドアを「ただいま」と言いながら、音を立てないように開ける。
すると意外にも――奥の部屋から声が――デエスさんの「おかえりなさい」という声が聞こえた。
よかった――と僕は安堵の息を漏らすが、そこにも少し、違和感を感じる。
不思議な感覚を抱きながらも、とりあえず所在を確認するために屋敷の声がした方の部屋へと歩いていく。
声はデエスさんの私室からだった。
僕は玄関と同じように、ゆっくりとその私室のドアを開けると、やっぱり、というかデエスさんが、ベッドの上に腰掛、ドアの方――正確には今しがたドアを開け、入ってきた僕へと顔だけを向けていた。その顔はいつもの笑顔とは打って変わって――とても悲しそうな、哀れむような、そんな顔だった。

「どうか、なさったんですか、デエスさん」
「あ……いえ、何でもありませんよ。さ、優織さん。此方におかけになって少しお話をなさいませんか？」
「いや……僕はとりあえず皆さんの安否を確認したいので――」
「おかけになって……ください」

デエスさんが息を呑んだのが、ありありとわかった。
何かを隠している――そんな風だ。
違和感の一つが、一層強まった。
僕は座らず、その違和感の一つを口に出した。

「エヴァンジェリンちゃんと、ガエターノさんは何処でしょうか？」
「――っ」
きっとデエスさんは、嘘や虚言を吐けない人間なんだ。――そんなものは、数年ともに生活していればわかる。
だが、だからこそ、答えを、彼女の口から聞きたかった。
「優織さんは――《魔法》というものを、信じますか？」
魔法？
反射的に聞き返した僕に対して、デエスさんは言葉を落とすようにして呟く。
「あの子――エヴァンジェリンは、今でこそ……いえ、あなたがいらっしゃってからは、ああやって元気ですが、あなたがいらっしゃる前までは、それはもう――病弱、だったんです。それこそ、三歩歩けば倒れてしまうような」
それは知らなかった。
いつも僕の周りではしゃいでいたあの子に、そんな素振りはなかった。
「私も……とても、とても驚きました。まるで、普通（ただ）の少女の様に、あんなに元気に動き回っているのが、バッドから碌に降りたこともない、病弱な自分の娘だなんて、良い意味で信じられませんでした。ですが――」
そこで一度、デエスさんは言葉を切る。
一呼吸おいて、意を決したようにもう一度、口を開いた。

「もしもあなたがいなくなれば、あの子はきっと、また病弱に戻ってしまう、ベッドで外を見る毎日を過ごすことになる。そんな気が……するんです。
そんな事を考えていたのは最近です。その「話」は、もう少し前からあったんです。いえ――正確には時を待つだけで、娘が5歳の時にその「話」の是非は確定されていました」

聞きたくないと、唐突に思った。
何故だろう――とても、とても、これから先の話を聞いては後戻りが出来ない――そんな気がするが、聞かなくてはいけない――そんな気もする。
そんな僕の様子を知らずでか、儚い顔のままデエスさんは話を続ける。

「あの人――ガエターノさんは、娘が4歳の時我が家にきた人でした。
そして娘が五歳になった誕生日、仰ったんです。私に。「娘さん――エヴァンジェリンちゃんを元気な体にしてあげましょう」、と。
娘はその日も、先ほども言ったようにベッドの上から降りられず、誕生日もベッドの上で迎えました。
きっと、その時の私はおかしくなっていたんだと――狂っていたんだと、思います」

「狂っている」、その言葉に僕の胸がドキリと跳ねたのがわかった。
――「あなた、狂っているのよ」
3年前に、目の前の女性とよく似たあの人に言われた、そんな言葉が頭をよぎった。

「夫が逝き、病弱な娘は5歳。私はとても疲れて、衰弱しきって、碌な栄養も摂れず、思考もきっと低下していたんです。

だから、そんな蜜のような甘い言葉に、惹かれてしまった。頭の中では、何かいけないことだとわかっていても、薬の中毒者のように、弱い自分の心を振り切って、手をだしてしまった。私の心が弱いばっかりに……」

それがこの様です。――そう言って、デエスさんは顔だけを僕の方に向けていた体を、僕の方に向けてきた。
ソレをみた僕はただ、絶句するしかなかった。
声も出せず、ソレを見て、何もいえなくなった。

デエスさんの体には――正確に言えば、体中に刺青の様な刻印が、蛇や何かの様に刻まれていた。
ソレは見るだけで人の嫌悪を誘う。
見た目がどう、ではなく、生物の深層心理「本能」の中でも一等重要な――「生存」本能が、ソレを視界に留めることを嫌がる。

「《契約》だと……ガエターノさんは、仰っていました。
そう、丁度5年前、娘の誕生日に交わしたのは《契約》。あの人は契約が履行されれば消えると仰っていましたが、それも本当かどうか。
とは言いましても、もう望みは断たれてしまったわけですが――っ」

デエスさんは笑うととても綺麗な、ガラス細工のような顔を、苦痛に歪めた。
僕は反射的に近寄ろうとするが、デエスさんは手で制す。
顔を苦痛に歪ませながらも、言葉を続けた。

「《契約》の内容の一つに、《他者への他言を禁ずる》というものが……ありました。
他言は効果を薄める、と言われましたがよくよく考えれば……それ

も少しおかしな話です。
もしもこの禁を破れば、体に刻まれた刻印から痛みを与えられると書いてありましたが――ふふ、ここまでとは、思いませんでした……つうっ」

この時、僕の「　　」は、無意識に感じ取っていた。明確な「死」の「気配」を。
死は「　　」にとって、最高のエサだ。一等、極上な。

「それに――痛みとは言いましても、恐らく……死、でしょうね。優織さん、あなたはきっと……知っているんでしょう？　「死」を」

また心臓が跳ねた。

「あぁ、いえ、答えていただかなくても、いいんです。これは、これから死に逝く女の、言い訳とお願いですから。
《契約》の内容は、エヴァンジェリンの吸血鬼化……だそうです。なんて、ことでしょう。何故私は、そんな契約を受けてしまったんでしょうか。やはり私は……心が弱いんでしょう……ね」

そうデエスさんが言い切った瞬間、屋敷にエヴァンジェリンと思わしき悲鳴が響いた。

「いやぁあああああああああああ！！　誰かぁぁあああああああ！！」

悲痛な、助けを求める少女の叫び声。
僕はたまらず駆け出そうとしたが、デエスさんを置いてはいけないし――何より、全て聞けていない。
ゴメン、すぐに行くから――と、心の中で念じるように言う。

「もう少し……もう少しだけ。
……そう、主人の死もおかしなものでした。恐らく――あの人が、関わっているのではないかと、思います。
では最後に……お願いを、よろしいですか？」

僕は答えられなかった。
確実に、目の前の女性に死神の鎌が迫っている事を理解できているが故に。
でも、この人のお願いは聞き届けなくてはいけない。

「こんなことを、私が頼むのもおこがましいかもしれませんが――娘を、エヴァンジェリンを、助けてください。
勘ですが……あなたならきっと、出来るんだと、思います。
そして、敵（かたき）を討ってください……主人と、この心の弱かった……私の……っ！」

僕はその言葉には返事をせず、静かに、言葉を搾り出した。

「二人は――下衆と、エヴァンジェリンはどこに？」

そういうと、デエスさんは何処か安心したように、僕の想像すらをも絶するであろう痛みを堪え、優しく笑いながら、僕に言った。

「広間の私のいつも座っていた椅子があったでしょう？　その下に、地下室への隠し扉があります。そこから降りてください。後は、道なりに」
「わかり……ました」

僕はお礼をいって、デエスさんの方から顔を背け、広間への通路へ

と体を向ける。
一言だけ、後ろを見ずに、僕は呟く。
「貴女は……弱くなんか、ありません。ああ――きっと、僕なんかよりずっと――強い」
それだけ言って、僕は走りだした。
デエスさんは「ありがとう」と言ったのが、後ろから聞こえた。
通路を曲がって、デエスさんの部屋が見えなくなった瞬間、一つの命が、「死」の気配と共に、消えたのがわかった。
とても、美しい人だった――と、そう思う。
デエスさんのお願いを、叶えたい。いや、叶えなきゃいけない。
――でも、だけど、助けに行って――いや、僕は人を救う事なんて出来るのか。この、血で汚れた手で――
答えの出ないまま、僕は広間へと走った。

――――――――――――――

目の前に広がるのは、真赤な血で書かれた不思議な光を発する幾何学的な文様の、所謂「魔方陣」と呼ばれるものだった。
その魔方陣の中心、少女は顔を苦痛に歪めながら、拘束され、寝転がされていた。
「おや、優織さん、お早かったですね」
常日頃の柔和なものではなく、研究者を思わせる下卑た笑みを浮かべ、男は僕に向かって、言った。

「こういったものを見るのは初めてですか？　そうですね、私は今、とても気分がいい。少しばかりお話をして差し上げましょう」

そういわれた僕は、何なのか理解できない力で壁へと叩きつけられていた。

叩きつけられた衝撃で。シヴァに貰ったものも落とし、体の自由も利かないまま、無言でガエターノを睨みつける。

「魔法、ですよ。優織さん。世界には、「魔法使い」がたくさんいます。何しろ、私もその一人でしてね。多くの魔法使いは世のため人のためなんていって、人を救う活動だったりしていますが、私は違う。私はですね、生粋の研究者なんですよ。知らないものを知ろうとし、ただその欲求のみに己が知己を動員する。それだけのために生きているんです。

そして私の研究の最大の成果――というよりは、現在進行形で実験中なわけですが。それがこの「吸血鬼化」。

いやはや、素材を探すのに苦労しました。

これほどの逸材を探すのはそれは苦労しましたよ。

条件としては、綺麗な、多目のの魔力。そして１０歳未満だということです。

これがまぁ、中々いないんです。だからこそ、これはとても、価値がある」

よっぽど――何が嬉しいのか――ガエターノは愉快そうに笑う。

「これ」と、地面に横たわる少女をさしたのであろう指示語に対して、僕は怒りを更に加速させ睨みつける目を更に細くさせる。

それに気付いたのか、ガエターノは厭らしい笑みを浮かべながら、喋る。

「ははっ、恐いですねぇ。まるでいつもの私を見ているかのような目だ。いや、もっときついかなぁ。はっははは！」

唐突に、ガエターノの喋り方が豹変する。
こいつやはり、気付いていたか。
ガエターノはそういって、僕の方に歩み寄り、手で顎を掴んできた。
僕は躊躇わず、ぺっと唾を飛ばす。
飛ばされた唾は見事にガエターノの右頬に当たる。

「触るなよ、下衆」
「は、ははは！　これは中々――何と言うか、強情な人だ。まるであの女のようじゃないか。――あの、バカな女！
あの女、本当にバカだよなぁ！　ちょっと夫を殺してやったらすぐに脆くなって。そこに漬け込んだだけで、あんな無茶苦茶な条件の契約を承諾しやがった！」

今――なんていった。
あの女だと――バカな女だと――この下衆は今、デエスさんを、そう言ったのか？
ミシリ、ミシリと僕の叩きつけられている壁が軋む。

それには気がついていないのかガエターノは顎から手を放し、僕に背を向けエヴァンジェリンの元へと歩いていく。

「と、まぁ、無駄話もここまでにしようか。私は野蛮なことと、無駄に時間を浪費する事が嫌いでね。そして、さっさと研究の成否を見たい。というわけで、優織さんはそこの壁でおとなしくしていてください。なぁに、すぐですから。終われば、あなたは何も考えずに死ねばいい」

そういってガエターノは怪しい液体の入った試験管の中身をエヴァンジェリンにかける。
その後、何か聞いたことのない言葉――感じからして、ラテン語だろうか――を、本を読みながら謳うようにして読み上げる。
全てを言い終えたのか、あぁ、そうだといってガエターノはこちらに向き直ると、愉悦に顔を歪ませ、言った。

「優織さんは、その手で何人殺しましたんですかぁ？」

――っ。
言葉が出なかった。

「いや、これはちょっとした好奇心でしてね。研究者の性というヤツですよ。
あなたは、とても水で洗い流せないような血の匂いがするんですよ。
はは！」

その苛立ちを加速させる笑い声に、僕の両腕は今、完全に枷を外した。
両腕だけではない、その言葉に、僕の何もかもが枷を外した。
先ほどまではミシリと軋むだけだった壁が、大きな音を立てて、崩れた。
それと同じに体の自由が完全に効くようになった。
僕は手首、足首、首と順に体の動きを確認し、ガエターノの目の前にたつ。
対するガエターノは驚いたように、目を見開くが、その口調はあまり変わらない。

「こりゃ驚いた！　はっはっは！　これを力技で破るなんて！

だが――残念。これにて儀式は成立(な)る！」

ガエターノはそういって、自分の腕を引っかき血を魔方陣の上へと滴らせる。
瞬間、ぼんやりと輝いていた魔方陣は、真赤な光を煌々と輝かせはじめた。

「私の血には真祖の吸血鬼が少し混じっていてね、ははは！　君と同じさ！」
「手前なぞと一緒にしてもらいたくはない」
「いいや、同じさ！　私も君も「普通」じゃあない！」
「――っぅ！」

――「　」が藪の中を進む蛇や砂漠の砂の中を蠢く蠍(サソリ)のように、僕の中を移動していく。
そういっている間にも、光は強さを増し、場には圧力がかかる。

僕は咄嗟に、先ほど落としたモノを拾った。
カタカタと、ソレは町で「稲妻」を見たときよりも更に、激しく揺れ動く。
限界だ、と言わんばかりに、ソレは動きを止めない。
わかっている――今の「　」は、確実に抑えきれない。
約3年ぶりの、衝動。
光に呼応するかのごとく、心臓が胎動し鼓動を刻む。

「君は少々特殊なようだが――ははは！　出来るならば研究したいところだが、如何せん時間がないものでな。それに、姫君もお起きになったようだ！」

そういったガエターノは、後ろのエヴァンジェリンを見やる。

いつの間に立ち上がったのか、エヴァンジェリンはふらふらとしながらも、立ち上がっていた。

「姫君は起きたばかりで機嫌が悪い！　相手は君にしてもらうことにしよう！　精々頑張ってくれよ！」

そう叫んだガエターノは、僕の前からいきなりその姿を消した。
何が起こったのかはわからないが、とりあえずエヴァンジェリンの安否を確認しなければいけない。
そう思って近づいた時に感じたのは、一瞬の殺気だった。

――こうして首と胴が繋がっていられるのは、幸運だったという他ない。
もしも僕がソレを拾っておらず、「　」が動き出していなければ、確実にもう一度世界がずれていただろう。
僕の頭に浮かぶのは、先ほどのガエターノの言葉。
――姫君。
コードネームか何かの呼称かもしれないが、恐らく、列記とした意味を持っているんだろう。
文字通り、何かの姫なのか、はたまた僕の思いつかないような意味か。
しかし、今それを考えたところで事態が好転するとは思えない。
そんなことを考えていると、また、殺気が襲ってくる。
幸い、殺気のお陰で、僕でも何とか反応する事が出来る。
その折、エヴァンジェリンはブツブツと、独り言の様に呟いていた。

「……あ……あぁ……ぁぁあ……あぁあぁぁぁぁ@#Д$%Å■■■■■■■■■■■■■！！」

最後には最早、言葉として成り立っていい。

ただ、一つだけ、わかることがあった。
彼女はとても――悲しんで、いる。
どうしてかはわからないが、彼女が深い悲しみを持っている事が理解できた。

彼女は完全に理性を抜け落としてしまったのか、僕へと跳躍するようにして向かってくる。
いつのまにか生えていた、長い鋭利な爪を僕に対して振るった。

――瞬間、僕の首から血が迸った。

まさに今千切れかけようとしていた理性が、完全に切れたのがわかった。
待っていたとでもいうように、「　　」が僕の思考の回線に割り込む。

その時ブチリと、遂に「ソレ」を封していた紐が切れ、中身が露になる。
それは漆（うるし）の黒。
漆黒、読んで字の如く。正しく、その色、深淵を思わせる。
滑ることのないように紐を巻きつけられた取っ手。
光を反射し、漆黒を一層際立たせる、鞘。
僕はそれを「　　」の意識の元、抜き、投げた。
鞘から顕れたのは、息を呑むほどの、重厚な光を発する、刃。
即ちソレとは――刀であった。

そして「僕」は「　　」へと完全に切り替わった。

その後のこと、忘れもしない、
この目で、しかと、見届けたから。

二度と、忘れる事はないだろう。忘れてよいことでも、ないだろう。

ただ一つ、終わりに見えた真紅の背中は、よく、わからなかったが。

第六話（後書き）

つぎは１０日の零時です。

感想とか、ポイントとか頂けると、嬉しい限りで御座います。

第七話（前書き）

楽しんでいただけるといいなぁ、と。
よろしくです。

第七話

いつ、気を失ったのだろうか。
目を開けるという生理行動をして、やっと気がついた自分に苦笑する。
体の自由は利くのか、手のひらを握ったり開いたりして確かめる。
寝かされていたのは、3年前と打って変わって、何の変哲もない草の上だった。
辺りを見回す。
どうやらここは森の中――それも、水の流れる音が聞こえる事から、川の近くだろうことが予想できる。
傍らには、金色の少女が寝息を立て、眠っていた。
もう、落ち着いているようだ。
ふぅと、安堵の息を漏らしてすぐに、のどにこみ上げる嘔吐感。
体が、この少女を見ることを無意識に拒絶している。
それもそうだろう。
「あんなこと」の後だ。
少し前に見ていた光景を思い出し、さらに吐き気がこみ上げる。

僕はあの光景を、第三者のように見ていた。
加害者であり、直接手を出したというのに、まるでそこに実感がない。
見ていた、いや、見ていることしか出来なかった。
体の自由は乗っ取られ、なるがままにされる。
その癖、感覚や神経は僕にも繋がっていて、肉を裂く感触、返り血を浴びた時の顔に水分が付着する感覚、骨を折った感触、それだけが脳に情報として伝達されてくる。
初めてではないが――慣れるものでも、慣れたいものでもない。

やはり、吐き気は消えない。
幸い、ここから川には近いらしい。
僕はふらふらとしながらも立ち上がり、音のするほうへと歩いていった。

――――――――――――――――――――

数十メートル歩くと、やはり川があった。
透き通るほどに、綺麗な川だ。
――清き水に魚住まず、とは言うが、不思議なことに、この川には多くの魚が、自由気儘に泳ぎまわっていた。
僕はゆっくりと川沿いの水がかからない場所に腰を下ろし、両手を水の中へといれ、掬うようにして持ち上げる。
ひんやりと冷たい水が手のひらを刺激するが、冬ではなくて秋だった事が幸いして、丁度いいくらいだ。
僕はゆっくりと両手を顔へと近づけ、バシャリと掛ける。
――先ほど出来たであろう傷に、シンと染みた。
そういえば、と思い僕が「　　」に切り替わる発端となった首の傷があろう位置に手を這わせると、何もなかった。
どんな魔法だ――うっ。
魔法という言葉を考えて、少し嫌な気分になる。
――「魔法だよ」
ガエターノの言葉。
――「世界には「魔法使い」がたくさんいます」
首を左右に振って、思考を散らす。
あんな下衆のことなど、考えたくも無い。
気分を戻そう――二杯目の水を汲もうとすると、川上の方から、赤い何かが流れてきた。

流れてきたのは、当然、桃などではない。
何かと思い、僕は精一杯手を伸ばして、ソレを掴む。
ソレとは、下着だった。
女性用の、真赤なパン――

「ほぇ？」

何故に？
桃だった方がよかったかもしれない。
そしてこれの持ち主についての考察だが、きっと、恐らく、これの持ち主のセンスは「凄い」。
――なんていう、現実逃避にも似た思考を巡らせていると、川上から、また赤い何かが――走って、きた。
遠目で見てもよくわからないが、恐らく、たぶん、きっと、この下着の持ち主であろうことは自明の理だ。

その姿が近づくにつれ、その全容が明らかになってくる。
赤いと思ったのは、その真赤な髪の毛だった。よく見れば、奇抜な稲妻を思わせる黄色いメッシュのようなワンポイントが入っている。
そしてまぁ、それはもう、１０人が１０人――１００人が１００人振り返るような、とんでもないプロポーション。
ただ――目つきが異様に悪かったが。
そんな女性が、川上から、凄い勢いで走ってきていた。

――全裸で。

僕は咄嗟に、手に持っていた真赤な下着を放りなげた。
ただ、投げた方向が悪かった。
僕を線上にして、真っ直ぐ突っ込んでくれば確実に女性とぶつかるであろうラインが、出来ていた。

女性はとんでもない速さで僕――正確には、僕と同一直線上にある下着に向かって、だが。

瞬間、僕の意識は飛んだ。

――――――――――――――――

気がついたら、僕が寝かされていた場所で、僕の目の前に、真赤な女が胡坐を掻いていた。

何時間立ったのか、闇は帳を降ろし、光るのは女がつけたであろう焚き火だけだ。

僕がムクリと上半身を持ち上げると、女は口を開いた。

「お――起きたか。まぁ説明は後回しにして。あたしの名前は哀川潤だ。まぁ、気軽に潤様とでも呼べ」

「命令形！？　しかも様づけを強制！？　初対面なのに！？　第一、呼び方自体は気軽じゃないんですねぇ！」

とんでもな人だった。

初対面で寝起きの人間に対して様付けを強制するくらいに、とんでもな人だった。――現在進行形で、強制されようとしているが。

「あ？　え？　初対面じゃあないだろ。町で会ったじゃん？」

「えっ」

町――町であった赤い人――あぁ、そうだ、あの人だ。

僕が逃げ出した、あの恐い人。――でも、今はそうは思わなかった。

なんでかは、わからない。

ただ――

「あぁ、そういえば、見ました……ね。でもそれ、「会った」っていいます？」
「あたしが会ったといったんだから、会ったっつーことになるだろ」
――もう何か……どうとでもなれ、と。
「それはそうと、だ、お嬢ちゃん」
その、僕に対する代名詞に、少しムッとした。
「お嬢ちゃんは、やめてくれませんかね」
「じゃあ――名前、教えてくれ。まだ名前、聞いてなかっただろ」
終始この人に会話の主導権を握られるのも、少し癪な気がする。
僕はちょっとだけ反撃してみる。
「僕も貴女の名前は聞いていませんよ」
「おぅ、そうだっけか？　まぁ、人に聞く前に自分からとも言うしな。あたしの名前は哀川潤だ。気軽に潤様とでも――って、さっきもやったわ！」
――なんでだろうか。この人、弄ると楽しいタイプかもしれない。
そんな予感が頭をよぎる。
いや――でも、後でなにかしっぺ返しを喰らいそうな、そんな気もするけれど。
「はは、すいません。……つい。僕の名前は、まぁ適当ですが――優織、哀川優織といいます」
「あいかわ……あいかわ、ゆうしき、ね。覚えた覚えた。――って、お嬢ちゃん今なんつったぁ！？」

ああ、五月蠅い人だ。
そしてツッコミが遅い。――というか、タイミングが、ある意味よ過ぎるのが気になるところではある。
仕方なく思いながらも、僕は答える。

「《命令形！？　しかも様付けを強制！？　初対面なのに！？――」
「そこまで戻んな！」

やっぱおもしろいかも。
この三年間、こんなテンションで接せる人、いなかったから。生前も――だけど。

「お嬢ちゃん、たぶん、いや、「哀川」……ってか「織（しき）」っていったか？　言ったよな？」
「えぇ、言いました」

ケロリと言う。

「ふーん。なるほどね。いや、まぁ、或いは、たぶん――。
――まぁいいか」
「流しちゃうんですか！」
「《流しちゃうんですよ！》」

――えっ？
今この人は、確かに僕の声で喋った。
声帯模写――というやつか。少し、嫌な感じ。
まぁ――そろそろやめた方がいい気がする。
僕は声のトーンを落として、聞いた。

「お巫山戯はやめます。それで貴女は、何をしに？」
「――依頼だよ。あたしはある依頼を請負（うけお）った。《人類最強の請負人》、哀川潤が請け負った、一等モンの依頼だ」

依頼。
その依頼はきっと、僕に関係のあることだと思う。
僕はこの世界にとって異物で、目の前のこの女性も異物だろうから。
だから、なんとなく、それとなくわかる。

「依頼主はなんていったか。――あぁ、思い出した。あの飛び切りの女、シヴァ――って言ってたか」

守秘義務とかは、何て一瞬聞こうと思ったが、やめておいた。
碌な答えは返ってこないだろうことはわかる。

「《うちの息子を頼みます》ってな。おいおい、神様よ。冗談じゃあねぇぜ。依頼の内容と実際が少しばかり食い違っているんだが。これもあれか、誤差の範囲か」

女は饒舌に語りだす。
それにしても、シヴァがこの人を呼んだのか。
人選が間違っている気がしないでも、ない。というか、絶対間違えてる。

「そういうわけで、改めてだが、ゆーちん」
「ゆーちん！？　いつの間にそんなへんてこな渾名が確定されていたんでしょうか！？」
「今決めたー」

――了解しました。僕は諦めればいいんですね、お母(シヴァ)さん。

「有無を言わせず、是非も問わないし、意思の確認もしないが、とりあえずあたしについてこい、ゆーちん」

「は、はぁ……」

全くわけの分からない人だ。

突然現れたかと思えば、シヴァの遣いだったり人類最強　（自称）だったりついてこいといったり、まるで――そう、主人公のようなことをする人だ。

主人公――その言葉が、どうしてか彼女を形容するのにとてもしっくりとくる気がする。

根無し草の放浪タンポポの種のような行く宛のない僕は、ついていくことは一向に構わない。

だが、彼女は――僕が守ろうとして、幾度となく切り裂いた、金色の少女は、どうする？

少女はまだ、目を覚ましてはいなかった。

まるで死んでいるかのように昏倒し続けている。

少なくとも、僕に責任の一旦があることは、確実だ。

それならば――そうでなくとも、僕には彼女を見守らなくてはいけない、義務――少し、違うな。彼女を見守ろうと思っている僕のソレは、我儘に近い。義務ではない。放り出してもいい、見守ってもいいし、他の選択肢をとってもいい。僕が少女に対してする義務は、事実上、無いに等しい。

少女の事を考え、僕はハッと顔を上げた。

「潤さん、怪しげな男を見ませんでしたか？」

「あぁ見たな。逃がしちゃったけど」

「……」
「……」

ガエターノの行方は知れず。
僕の終着点は、彼の近くにあるような気がする。
――そんな何の確証もない予感が僕の頭を過ぎる。

「……あの男を追いたいのかい、ゆーちんは」
「潤さんはどうだと思いますか」
「――やめとけよ。少なくとも、今は」

――ッ。
声には出さず、顔にも出さないように、歯茎と手ににに力を入れた。
ギリ、と歯軋りの音が骨を伝わって脳に伝達され、力を入れすぎた手のひらは自分の爪で引っかかれ、血がぽたりと垂れた。

「理由を聞いても？」
「今のゆーちんじゃ、２秒が精々だな」

２秒？
２秒で、僕はどうなる？
死ぬのか？

「あぁ、そうだ。あたしもつい油断しちまって、久しぶりに死んじまった。あいつの強さは相当だ」

まぁ次は負けたりはしないが――と、潤さんは笑顔でいう。
僕はといえば――久しぶりに死んだという言葉は置いておき――けはしない。

「潤さんって生き返ったりできる人なんですか」

バカっぽく、それは何かの言葉のあやだろうと思いながらも聞いてみると、あっけからんと、潤さんは答えた。

「あぁ。冒険の書への書き込みと、復活の呪文さえ覚えていればな」

「ドラクエかよ！？　というか冒険の書があるなら復活の呪文は要らないだろうが！」

頭が痛くなった。

そんな人間が――いや、最早この人を人間という定義に評していいのかもわからなくなってきた。

いやいや、と潤さんは首をふる。

「死ぬとな、まず目の前が暗転する。そして画面下方にログが出てくるんだよ。《冒険を続けますか？　・はい　・いいえ》ってな」

ここでいいえを選ぶと人生終わり――なんて、潤さんは僕に構わず熱心に適当な説明をしているけれど、僕は頭に入れないようにほー、へー、はーと、てきとうに相槌を打っておく。

「生憎と、僕が死んだ時にはそんなことはありませんでしたよ」

「なんだ、つまらないな」

「なんだとは何ですか」

「《なんだとは何ですかとは何ですか》」

「なんだとは何ですかとは何ですかとはにゃんですか！」

「《にゃんですかとはにゃんですか！》」

「「……《はぁ》……」」

「潤さん」
「《なに、ゆーちん》」
「怒っても、いいですか」
「ここ譲るよ、ゆーちん」
「それはどうも」

バコン、と思いっきり、袋に入れたままの刀で潤さんの頭をたたいた。
痺れた。――勿論、叩いた方の僕の腕が。

――――――――――――――――

「なるほどな。この女の子のことが、ゆーちんは心配だと」
「まぁ……そう、ですね」

夜の闇は更に深まり、少しばかり見えていた周囲を囲む木々は、火を以ってしても認識する事が難しくなってくる。
潤さんは未だ目を開かない少女を、投げやりな風に指を指して、そんなことを言った。

「この嬢ちゃんは吸血鬼、なんだろ」
「正確には、人為的に作られた人工吸血鬼でしょうね」
「ゆーちんは意外と冷静だね」
「いえ、煮えたぎっていますよ。とても、とても、活火山の噴火前みたいに」
「そっか」

潤さんは意外にも、それだけしか言わなかった。
この数時間の行動から、もう少し何かを言ってきそうな気もしていたけれど。

潤さんは、空気を読めるタイプなようだ。―ただ、空気を読めるのとぶち壊すのでは少し違うことを、潤さんは理解しているのだろうか。

「あたしの知り合いに、吸血鬼がいたと思うんだよ、ゆーちん」
「へぇ」
「何だ、驚かないのか」
「まぁ、潤さんですし」
「《そう無反応だと、僕少し困っちゃいます》」

怒りますよ、と僕がいうと、潤さんは肩を竦めて上がり調子で、ゴメンゴメンと、誠意も大してなさそうに謝ってきた。
このス女子の時間だけで、哀川潤という人間の雰囲気はある程度わかってきた。この人は言うなれば、真面目に付き合ってはいけない人、ナンバーワン。そういう感じの人だ。

「そいつに預けようかと思うけど、どうかなゆーちん」
「その人は、どんな人ですか。あ、いや、人はおかしいか。どんな吸血鬼（ヒト）ですか？」
「吸血鬼と書いてヒトと読むのか。つまりゆーちんは詩人だと」
「……」

僕が無言で睨むと、潤さんは無邪気に口を歪ませた。

「自称５００歳の吸血鬼だよ、ゆーちん。実年齢は確か……そう、５９８くらいだったか」
「大したサバをお持ちな方の様で」
「そうだね。その気になれば１０日で地球を破壊できるらしい。―
―まぁ、あたしがさせないけどな」

そういって潤さんはニカっと笑った。
目つきは悪いが、潤さんは笑うととてもかわいい。見惚れてしまうくらいに。

「あれ、でも、その吸血鬼(ヒト)はこの世界にいるんですか？」
「まぁ探せば見つかるんじゃね？」

やっぱり、この人はとんでもな人だと、改めて思った。
だけどこの人は、見つけてしまうんじゃないかというような、変な信頼感と安心感を感じてしまう。
きっとそれも、潤さんの魅力なんだと思う。

「まぁ、続きは明日にしようぜ、ゆーちん。時間はまだあるんだ。気長にな」
「わかりましたよ」

潤さんは徐に手を赤いスーツの中に突っ込むと、物理の法則を素通りしたかのように、大人用と思わしき寝袋を2つとり出した。
こういう人がいるから――と、そこまで考えてやめた。この人には、僕が精一杯身につけた常識や価値観は、通用しないのがわかったから。

僕は無造作に投げつけられた寝袋を両手でキャッチし、ジッパーをあける。
やっと慣れてきた夜目で何とか寝袋の全貌を見ると、まぁ、予想通りの真赤であった。
仕方が無いか、と思い僕はエヴァンジェリンちゃんを抱きかかえ、一緒に寝袋に入る。
親子でも使えるようになっているのか、顔を出すところは大小二つの頭が出るくらいの大きさで、中も丁度そのくらいだった。

潤さんは、一体全体なんなのか。
僕はそんな疑問を抱きながらも、一日の疲れに負け、いつの間にか意識を落としていた。

第七話（後書き）

次が、ラストなんです。えへへ。

感想とかいただけると嬉しかったりします。

潤さんの正しい動かし方がわからにいです。
破天荒で常識破りすぎて勝手にどっかに行ってしまいそうなキャラですよ。
どなたか「正しい哀川潤の使い方」もっていませんかね……ハハハ。

第八話（前書き）

ついにラストです。
序章のくせに中々長かったで御座います。
楽しんでいただければ幸いです。

第八話

起きてみると、寝る前にあった柔らかな感触は何処かへと消えていた。
そう、僕と一緒に寝ていた少女、エヴァンジェリンがいなかったのだ。
目を覚ましてどこかにいってしまったのか――？
とりあえずは起きなければ始まらないな、と思い僕は寝袋のジッパーをあけ、上体を持ち上げる。
潤さんの方を見てみると、盛大にいびきを書いて、寝袋なんか気にしねぇとでもいうかのように、草の上で寝ていた。
僕はそこら辺に落ちていた木の枝でツンツンと、寝ている潤さんの頬をつつく。
柔らかな感触だった。
何回かつついてみるが、潤さんは起きる気配もない。
ならば今度は、とエヴァンジェリンのことをしばし忘れながらも指で直接つつこうとしたその瞬間――！
つつこうとした指の先、手首が、つかまれた。
掴んだのは潤さんだった。
しかし潤さんは目を覚ましていない。
無意識でやっているのかもしれない。
やはり、凄い人だなと感心しながらも、何とか取れないかと掴む手を引き剥がそうとするが、剥がれない。
困った。これでは身動きが取れない。
潤さんはただ掴むだけで、何かをしてくる素振りはない。

油断して顔を近づけたのが、間違いだったと言えよう。
――何が起こったのか理解できなかった。
何か起きたという事自体に気付き、行動を起こした時はもう、遅い。
ぐわし、と言う効果音がつきそうなほどに、潤さんはぐわしっと僕の後頭部を掴んだ。
後のことは、言わずもがな。

目を開いていない――息も、寝息。
あぁ、この人やっぱ――
――嫌いかも。

こうして、僕のこの世界での「初めて」が、一つ奪われた。
とてもとても大事な、「初めて」が。

「ぅん～～～～@Σωβθд#Э?Яっっ！？」

それからほどなくして目を開けた潤さんに、僕は無言で拳を振り下ろした。
やはり――痛かったのは、僕の方だったが。

――――――――――――――――

僕は顔を不機嫌に歪ませ、潤さんを睨んでいた。
その様子を潤さんは機嫌がよさそうにながめ、笑っていた。
僕はそれはもう――果てしないほどに、不機嫌だ。

「《ファーストキスが奪われた。ただし同性》みたいなっ！」
「死んでしまえ」
「《ゆーちんがそんなに不機嫌だと潤さんは困りますよ》」

「死ね。氏ねじゃなくて死ね。輪廻の輪から弾き飛ばされて跡形もなく消滅してしまえばいい」
「《バカヤロウ！》」
バシンと、いきなり潤さんに修造みたいな声で頬を叩かれた。
当然のことながら、僕は不満を口に出す。
「何ですか。痛いじゃないですか」
「《痛い？　叩かれた人はね、もっと痛いんだよ》」
知ってる。現在進行形でいたいです。
あとなんかその台詞聞いたことがあるような気がしますけど、スルーします。
「それはそうと、潤さん。僕が何で機嫌悪いのかわかってます？
本当に」
「あぁ、わかっているともゆーちん。アレだろ、アレ。――何だっけか」
結局どれだ、という突っ込みはのどに留めておく事にする。
「――もういいです。忘れます。そこで一つお聞きしますが――エヴァンジェリンちゃんは、何処ですか？」
これを聞くのに、どれだけ無駄な時間を食ったやら。
いや、責任は僕じゃない。潤さんが悪い。大体潤さんがいけない。
「おぅおぅ酷いな、ゆーちんは。何でもかんでも人の所為にしやがって」
「心を読まないでください。それで――」

「あの吸血鬼っ子なら、置いてきた」
潤さんはそれだけ言うと、盛大に欠伸をした。
えっと――あの――
「何処に？」
「ほら、昨日言っただろ。吸血鬼のところに」
いたんだ、この世界に、そんな危ない吸血鬼（ヒト）。
というか、こんな広大な世界でどうやって一晩で見つけたんだよ――って、あぁ、潤さんだから仕方ないのか。
僕がそんな風に納得していると、潤さんは僕に向き直ってきた。
「さて、ゆーちん、そろそろ行くかね」
「何処に」
「何処かに」
僕が不明瞭な質問をしたら、潤さんも不明瞭な答えをよこしてきた。
やっぱり変な人だ。人なのかは、やっぱりわからないけど。
「行く場所なんて、決めないでいいんだよ、ゆーちん。進んでいけば自ずと見えてくるものだよ、道ってもんは。なに、心配する事はない。あたしが通る道だ。あたしが通る道がなんだかわかるかい、ゆーちん」
「わかりませんよ」
「あたしの行く道はな、王道だよ。陳腐だけど、一等楽しい王の道だ。だから、何も言わずについてきな、優織」
――少し、認識を改めようと思う。
潤さんはいうなれば、そう――「主人公（ヒーロー）」だ。

舞台の真ん中で、ソロパートを披露して観客を魅了する、飛びっきりの主人公――それが哀川潤なのだ。
哀川潤は、ちょっと僕にとって苦手で。
哀川潤は、ちょっと変な人で。
つまり哀川潤は、僕の苦手なちょっと変な主人公。

「ついていこう」と、そう思えてしまう。
だから僕は、そんな気持ちに従って、彼女についていこうと、そう思う。

ふと潤さんを見てみると、その顔は朝日が当たってとっても綺麗で、とっても、かっこよかった。
潤さんは僕の視線に気付いたのか、僕の方を見て目を合わせると、無垢で無邪気な子どもっぽい笑顔を向けてきた。
つい僕も、釣られて笑ってしまって、恥ずかしくなってしまって。
顔を俯けたら、随分と伸びた僕の髪の毛が乗っかった頭を大雑把にくしゃくしゃと撫でてきた。
この人は、とてもずるい人だ。
きっと、たくさん恨みを買っている、ずるい人。

僕は更に恥ずかしくなって、潤さんが頭から手を離して歩き始めるまで、顔を上げられなかった。

――汝は何を求める。
問うは誰ぞ。

刀の入った袋を強く握り、少し先に歩いていってしまった潤さんの方へ、僕は小走りに駆けていった。

――汝は何を望む。
何者かが問う。

優織の持つソレは、彼女も気がつかないほどに小さく、揺れた。
――まるで何かの始まりを告げるかのように――

傾いた世界は動き出す。

傾きを直すことを渇望し――世界は動く。

中心に在るは、珍妙怪奇摩訶不思議――魑魅魍魎の如き存在。

世界は――そのズレを僅かに、広げた。

世界は始まり――世界は終わる。

自然の摂理の様に――世界はその「時」を動かし始めた。

「終わりは意外と、近いものだな――」

男は一人、呟きを残し、消えていく。

世界は――狂乱の宴を今――始めた。

――――――――――――――

西洋を思わせる町並み。
それを――やはり西洋を思わせる、建築技術の高さをありありと感じさせる巨大な駅の、時計のすぐ隣にいるソレは――見下ろし、眺める。
思いついたように、ソレは呟き始めた。

――何ト言フコトカ。至ッテ至極上等ニ珍妙不可思議ナモノダ。
――マァ、イイカ。
――征コウ、未知（道）ヲ探シニ。

――それでは、許し許され、今生一代（こんじょういちよ）の鮮華（センカ）を散らそうか――

ソレは
何のけなく
地上２０ｍはあろう場所から飛び立ち
ココンと
子気味のよい靴の音を響かせ
その地へと
足をつけた。

人口の９割、学生。
規模は約埼玉県。
その地のことを、人はこういう。

麻帆良学園。

魔法の都市と。

ソレは、物語を始める。
５００年の年月を経、ソレは気儘に世界（モノガタリ）を作っていくのだ。
病的なほどに真っ白な、長い長い髪を靡かせて。

これは、そんなお話。

第八話（後書き）

ここまで、序章。
自分でもまぁ、今までで一番頑張ったと思います。
文自体はまだまだですが、これからも精進したいと思っています。

次話の掲載は未定です。
少なくとも、４月までは更新しないと思います。

最後に言うのもなんだか変ですが、感想とか、いただければ嬉しいです。えへへ。
この作品は思いつき出始めましたが、どうにも楽しくて。ははっ。

続きは書きたいと思っています。

では、また。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2813ba/

魔法先生ネギま!――哀川優織の躍動世界――

2012年1月10日18時12分発行